

令和6年度第2回人間文化研究機構教育研究評議会 議事概要

- 日 時： 令和6年6月13日（木） 10：00～12：05
- 場 所： 大手町プレイスホール&カンファレンス Conference103
- 出席者： 井上、宇田川、内田、神作、木部、栗本、クレインズ、酒井、佐藤、設楽、高野、陀安、西谷、野家、速水、堀、前川、松本、宮崎、山極、吉田（和）、吉田（憲）、渡部の各評議員
- 陪席者： 若尾理事、小泉監事、井上監事、井上事務局長
- 事務局： 監査室長、歴博、国文研、国語研、日文研、地球研及び民博の各管理部長、本部事務局の総務課長、研究企画課長、財務課長、施設課長、その他関係職員

○ 概 要：

議事に先立ち、機構長から、新たに就任した評議員等の紹介があった。また、事務局から、会議の定足数を満たしている旨の報告及び配付資料の確認等があった。

議 題：

(議事概要)

(1) 令和5年度第3回議事概要について（資料1-1）

機構長から、令和5年度第3回教育研究評議会の議事概要について報告があった。

(2) 令和6年度第1回（書面審議）審議結果について（資料1-2）

機構長から、令和6年度第1回教育研究評議会の書面審議の審議結果について報告があった。

(審議事項)

(1) 総合地球環境学研究所次期所長の選考について（資料2）

機構長から、資料2に基づき、総合地球環境学研究所現所長が令和7年3月限りで任期が満了することに伴い、教育研究評議会の意見聴取を行う旨の説明があった。

続いて、宮崎理事から、回収資料に基づき当該機関の運営会議における次期所長候補者の選考の概要及び候補者として推薦された者等について説明があった後、意見聴取が行われた。

意見聴取の結果、特段の意見が無かったことを受け、機構長から選考手続きを進めていく旨の発言があった。

(2) 令和7年度概算要求について（資料3）

宮崎理事及び組織要求している機関の長等から、資料3に基づき、令和7年度概算要求について説明があり、審議の結果了承された。

(3) 人間文化研究機構組織規程の改正について（資料4）

宮崎理事から、資料4に基づき、人間文化研究機構組織規程の改正について説明があり、審議の結果、了承された。

(4) 国際日本文化研究センターにおける寄附研究部門の設置について（資料5）

栗本理事及び井上日文研所長から、資料5に基づき、国際日本文化研究センターにおける寄附研究部門の設置について説明があり、審議の結果、了承された。

(報告事項)

(1) 第4期中期計画に係る自己点検・評価の実施スケジュールについて（令和5年度実績）

(資料6)

栗本理事から、資料6に基づき、第4期中期目標期間に係る業務の実績に関する自己点検・評価の実施スケジュールについて報告があった。

- (2) 人文学・社会科学のDX化に向けた研究開発推進事業（データ基盤の開発に向けたデジタル・ヒューマニティーズ・コンソーシアムの運営）への申請について（資料7）
堀理事から、資料7に基づき、人文学・社会科学のDX化に向けた研究開発推進事業（データ基盤の開発に向けたデジタル・ヒューマニティーズ・コンソーシアムの運営）への申請について報告があった。
- (3) 人間文化研究創発センターの活動状況について（資料8）
栗本理事から、資料8に基づき、人間文化研究創発センターの活動状況について報告があった。
- (4) 各機関からのトピック報告・意見交換（資料9）
内田歴博副館長から、歴博の研究に関するトピックとして、「歴博における映像資料の保存と利活用」と題し、報告があった。
渡部国文研館長から、国文研の研究に関するトピックとして、「Ⅰ「データ駆動による課題解決型人文学の創成」事業の開始」「Ⅱ 原子力災害被災地域等での史料レスキューの活動」「Ⅲ 祐徳稲荷神社中川文庫の総合目録の刊行」と題し、報告があった。
前川国語研所長から、国文研の研究に関するトピックとして、「国立国語研究所における言語資源の開発とオープンサイエンスへの貢献について」と題し、報告があった。
また、本件に関し、以下の意見交換があった。
- ・ 歴博の映像資料について、AIの無断学習対策は考えているか。
⇒ 映像資料の配信に関しては、インターネットを介して公開することで、想定外の使われ方をする可能性も懸念し、情報、画像、動画を限定して公表しており、自由に使える素材の提供についてはこれからの課題と認識している。
 - ・ 歴博の映像資料の活用について、現地から要望の声があがったらどう取り組んでいくのか。
⇒ 映像資料について現地教育委員会共催で完成上映会を行った。その際、現地の小学校、中学校でも上映会をしてほしいという意見があがったため、今後検討していく予定である。また、現地教育委員会や制作協力してくださった出演者の方にはDVD、Blu-rayの配布をしているため、それを活用してもらうことも可能だ。
 - ・ 歴博の映像資料について、地方自治体等が所有する公開されていない映像資料がかなりあるとのことだが、これはどう利活用していくのか。
⇒ 地方自治体が所有しているものなので、その利活用については答えることはできないが、個人や地域で所有している映像について地方の方から相談を受けた場合は、いったんこちらで簡易に映像を見られる形にし、場合によっては高精細なデジタル化をして、地域の方々と一緒にそれを見て学べるような取組をしている。
 - ・ 国語研の報告について、言語資源の整備は、これまで言語資源開発センターが中心になって取組んでいたのか。
⇒ 言語資源の開発は、主に外部資金で行っており、言語資源開発センターはコーパス開発の後から作られた組織で、現在はコーパスの管理や改良を行っている。
 - ・ 次世代言語科学研究センターにもコーパス部門があるが、これまでの取組みと次世代言語科学研究センターのコーパス部門は密接に連携していくということか
⇒ 言語資源コーパスについては、開発の段階で、利用、手法、活用のための設計について垣根を取り払った議論をするためにコーパス部門を置いている。また、今後は名実が一致するような国語研内での組織改革を考えている。
 - ・ データ収集や目録作成のような基礎研究と、先端的な研究とをどう有機的に連携させていくのか意見を伺いたい。
⇒ はっきりした方向性はないが、過去のデータからさらに次の新しい研究の芽が出てくるといふことがあるため、過去のデータをどう活用していくか、どう集積していくかは人文学の

非常に重要な役割の一つとして強調していかなくてはならない。

⇒ 分野の垣根を跳び越えて様々なデータベースを横断できるよう DH の基盤を活用してもらえ
るようにしたい。AI に関し、現在の生成系 AI はまだ十分に信頼できるものではないため、
我々人文系の作るデータ、手法や材料を提供し学習させた信頼性の高い人文系 AI への期待が
大きいと思われる。

・ アドバイザリーボード委員の先生方から、アドバイザリーボードの立場としての話だけで
なく、今のデータソースの取扱いをどう考えるのかといった議論の機会も設けてほしい。

⇒ 積極的にコメントをいただいたり、発言していただいたりする機会を設けていきたい。

・ 災害は全国的、例えば能登や熊本などでも起きているが、歴史資料レスキューのネットワー
クは、神戸大と東北大以外にも、全国的に広がっているのか、あるいは、広げるような努力を
しているのか。

⇒ 能登に関しても、新たに県各地の資料所蔵機関、博物館等、市の文化財関係の人をつなぐ
「いしかわ史料ネット」ができ、毎週活動している。

能登半島地震では、文化財防災センターが主導し、国の予算を使う形で文化財防災を行うや
り方が始まっているが、人間文化研究機構はこの文化財防災センターの活動に幹事団体とし
ても関わっており、センターからいろいろ要請を受けて、機構内の研究者が活動している。こ
ういったことから踏まえ、機構の役割は今後ますます大きくなっていくだろうと考える。

以上